

ヨルダン川西岸

ジェニンでの心のケア事業の 5年間を振り返って



2007年夏、ヨルダン川西岸ジェニン郡での心理サポート事業は、5年間の活動を終えました。この5年間を振り返ったまとめと評価です。

2002年のジェニン

2002年4月に、ヨルダン川西岸とガザでは、イスラエル軍の大侵攻があり、街や村、難民キャンプ、自治政府の省庁や学校、文化施設などが、徹底的に破壊されました。特に西岸のジェニンでは、数十日に及ぶ難民キャンプの包囲と戦闘があり、たくさんの犠牲が出ただけでなく難民キャンプの一部がブルドーザーで壊され、国際的にも非常に大きな問題となりました。

この年の夏に実施された5歳

から15歳の子どもを対象とした心理調査（下段参照）では、軍事的な緊張が子どもたちに与える影響が深刻なことが分かっていました。パレスチナ子どものキャンペーンでは2002年6月にジェニンを調査し、11月から幼稚園の先生とお母さんを対象にした事業を開始しました。一番身近にいる大人たちの心理状態が特に幼い子どもたちに強く反映することから、お母さんたちの心理状態を改善して、子どもや家族の心理状態の改善につながることを目指したものです。

道なき道を越えて村を巡回

最初の年は、まずジェニン市と4つの村の幼稚園をソーシャルワーカーが巡回して、母親向けのワークショップと先生向けのワークショップ、そして子どものためのリクリエーション活動を実施しました。幼稚園の新学期の始まる秋から夏休み前まで、こうしたワークショップをそれぞれの村で、母親向け教師向けそれぞれ10回ずつ開きました。その後、地域を変えながら事業を拡大して、5年間続けました。

子どもの心理調査

2002年に西岸とガザで、地元とヨーロッパのNGOが5歳から15歳1200人に聞き取り調査をしたところ、半数の子どもが占領による直接的な暴力にさらされたことがあり、4人に1人が家を破壊されたり、一時的に避難したことがありました。

60%の子どもは、親が自分のことを守ってくれることはできないと考えていました。70%の子どもは自分の努力によって社会を変えることができると考えている一方、武力によってしか状況を変えられないと考える子どもも7%いました。

JECC (ジェニン幼児教育センター)

JECCはお母さんたちとの関係が緊密で、同じ母親としての立場、同じ目線の高さを重視しています。ワークショップでも難しい専門的な言葉を使わないで、とっつきやすくし、今日教わったことを家でちょっとやってみようかなという感じを作っていました。絵本とか人形劇とかは、作ったものをそのまま家に持って帰るのですぐ使えますし、みんなで話したことを家で試してみようという人もいました。

担当のサナは自分に自信がついた、自分がすごく成長したと言っています。JECCの代表のアブラは、ジェニンという「地域」に対して何かできた実感したと言っていました。残念だったことは、現場が忙しかったり、JECCも予算が減少して人手が足りなくなったりで、レポートや会計などが追いつかなかったことです。サナもアブラも自覚はあって、なんとかしたいって思っていたのですが、そこまで手が回らなかった。サナは、報告書を書くことが自分にとって一番ネックでそのトレーニングを受けたいと言っていました。



母親向けワークショップでのサナ

母親向けのワークショップのテーマ

事業の紹介と参加者募集、ニーズチェックなど
親と子どもの関係 保護者とは、親とは
兄弟姉妹の関係
自己肯定感を育てるには
親にとっての子育て、子育てで最も大切なもの
子どもとは（発達について）
子どもの「かんしゃく」をどうする？
読み聞かせ
玩具を作ろう
人形劇

地元の NGO、ジェニン幼児教育センター（JECC）と共同での事業として、そのソーシャルワーカーのサナさんが、2 回の出産と産休を挟みながら 5 年間中心となって担当しました。彼女は、ナブルスの大学で心理学を学び、その後 JECC のスタッフとして、主に幼稚園の先生の研修を担当していました。

2002 年から 2004 年までの間は、ジェニン市の周辺の道路は遮断され、途中で穴が掘られていて通行が出来ない、戦車が道路をふさぐなど、移動が非常に大変でした。車が通れないところも多く、大きなお腹を抱え

ながら、サナは足元を泥だらけにして移動していました。

私たちもエルサレムからジェニンに行くのには片道 6 時間とか 8 時間かかっていた。検問所で理由なく待たされるのです。隔離壁が出来てからは、検問所で待つ時間は減り、いまは 3 時間くらいでジェニンにつきます。

母親向けのワークショップ

母親向けのワークショップは、①年齢や発達に応じた子どもの理解 ②ストレスにどう対処するか ③子どもとの関係を

変えるための具体的な方策などを教えるとともに、④母親どうし、母親と先生のネットワークを作ることも目指していました。ワークショップの参加者は各村 20 から 30 人で、5 年間では 600 人以上が参加しました。

具体的にはこんなことをします。「子どもは親によく似るといわれるけれど、どう思う？」をテーマに話す。子どもは親とは独立した人格だと認識することが目的です。また、「子どもをお使いに行かせるにはどうしたらよいか？」とか「性的なことに興味を持ち出した子どもにどう対処するか？」などのテー

村の様子

ジェニンは平坦で農業が盛んで、主として野菜を作っています。しかし土地を持たない人の多くはイスラエルに出稼ぎに出ていたのが、隔離壁ができて行けなくなり、職を失った人も多かったです。村の大きさは様々ですが、8000 人くらいのところから 1000 人くらいの所まであります。

最初の年に通ったコフラダン村には幼稚園が一つしかありませんが、村の中では「ロミオとジュリエット」のように二大家族が対立していて、向こうのお母さんたちが来るなら、こちらは行かない、というような場面もあり、サナはとても大変な思いをしました。また、ベイトカード村では外を誰も人が歩いていないのです。「女性は一人で外を歩くもんじゃない」という規範がすごく強いところで、ここではとりあえず、お母さんたちに幼稚園まで来て参加してもらうことが目標でした。

心理的な問題

2004 年の 4 月に難民キャンプの中学校で、14 歳の男の子が、同級生に何か言われたことに腹を立てて休み時間にその子の首にナイフを突き立ててしまい、被害者が亡くなる事件もありました。ジェニンのカウンセラーたちがみんなで学校に行き、子どもたちに対応しようとしたのですが、学校の先生たちに「必要ない。来るな」と言われて結局ほとんど何もできませんでした。「こんなものでトラウマなんてあるわけない。余計なことするな」というわけです。難民キャンプでは、小さな子どもでも、戦車が来るとそれを追っかけに行き、「自分は怖くないんだ」と言っていたりしますが、実はすごく怖がっていて、夜寝ると悪夢にうなされているというケースもありました。

2002年		2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	
6月	秋	5月	5月	5月	5月	5月	秋
スタッフ 現地派遣	事業開始						ラマツラー 事業開始
	コフラダン村						
	デイルガザーレ村						
	ベイトカード村						
	アッラベ村						
	ジェニン市						
		ジェニン難民キャンプ①					
		ジェニン難民キャンプ②					
		メルキ村					
		アルヤムーン村					
		ヤアバド村					
		カバーティア村					
				トゥバス村			
				ズブーバ村			

幼稚園の質的な向上も目指す

先生向けのワークショップは、幼児教育の基礎から始めて、先生たちが日常抱える問題への具体的な対処まで。パレスチナ社会では幼稚園の先生は専門資格ではなく、高卒で専門のトレーニング無しに幼稚園に勤める人が多く、また幼稚園自体が体系だった教育理念やプログラムもないところがほとんどです。親の多くは小学校入学前に字を覚え、足し算が出来ることを求めている、幼稚園は読み書きを習う場所とされていることが多いのです。

それから、お母さんたちの個別相談にのったり、カウンセリング、専門機関への紹介などもしましたが、些細なことから深刻なことまで、いろいろな問題を抱えた家族がたくさんいました。

ジェニン郡の中でも、ジェニン市、村、難民キャンプでは状況はかなり違います。難民キャンプにはしばしば外出禁止令が出され、戦車が入ってくることもあります。他方、軍事的な緊張の全くない村もあり、そこで

マでグループ討論をして、それを相互に発表します。テーマも重要ですが、みなで話し合うプロセスがもっと重要です。「子どもをたとえると何？」というテーマで絵を描くのは、普段暇がなくて、ゆっくり考えられない子どもとの関係を見つめ直す目的があります。

絵本を配って「読み聞かせ」をしあうのは、お母さんたちが絵本に触れた機会がほとんどないからです。母親たちはとても幸せそうにしています。日本でも有名な「はらぺこ青虫」もありましたが、他はパレスチナのオリジナルが多くて「猫はどこに行った」「サイドとブルブル」「ファールスとアマル」「僕

はお手伝いができる」「末っ子カルマ」なんていうお話です。彼らの住んでいる環境が舞台になっています。人形劇では「三匹の山羊のがらがらどん」もしました。

おもちゃや指人形を手作りして、劇を上演したりするのは、子どもとのコミュニケーション能力を高めるためです。また、風船やボールなどを使って体を動かすゲームで、ストレスを発散させることもありました。乳児を連れのお母さんも多く、ワークショップでは子どもたちの泣き声が響いて、なかなか集中できないこともあります。お母さんたちはこの会をとても楽しみにしていました。

外出禁止令

2003年は10月から一ヶ月くらいジェニン市に外出禁止が出されました。ジェニンに着いたときにイスラエルで自爆事件があり、ジェニン出身者が関わっていたというので、翌日から外出禁止。一週間くらい閉じ込められました。JECCの事務所はジェニン市にあり、サナも事務所に来ないとワークショップの材料も持ち出せないし、自分の家からジェニン市を通らないで村までいけないので、事業が進みませんでした。

「外出禁止だ、家に帰れー」。イスラエル軍のジープがアラビア語で叫びます。その時点から外出禁止です。みんなはばたばたと帰っていきます。店もさーっと閉まります。30分くらいはみんながばたばたと移動している時間。それからは誰も通らなくシーンとします。

病院は開けて良いので、医者・看護師はそのまま残って、禁止令が解除されて交代が来るまで働きっぱなしです。パン屋も開いているので、

近所で銃撃戦をしているとか、イスラエル軍の戦車がそこにいるということになれば、パンだけは買いに行っています。外出禁止令の間は、何もできないのでボーっとしているしかありません。多くの人はテレビをつけてみえています。子どもは家の屋上で風揚げなどをしていますが、1週間も続くと、小さい子どもがいたら大騒ぎです。

禁止令が終わる合図は不親切なことにもありません。

は失業や出稼ぎによる家族の分断、経済的な圧迫が問題です。ただ、直接間接を問わず、軍事占領下にあるので移動の自由さえなく、また経済的にも生活が苦しいことがあげられます。閉鎖的な村では、女性が一人で外出することが許されなかったり、難民キャンプには、弱音を吐けない雰囲気があったりします。

毎年夏休みには、各幼稚園で2週間、お楽しみ会を開きました。普段、読み書きが中心の幼稚園生活の中で、羽目をはずすことができるこのプログラムは、もちろん子どもたちに大人気でした。

女性たちが自信をつけ、ネットワークもできる

毎年、ワークショップの始まりと終わりには、アンケートをとり、インタビューをして、参加者の反応を聞き、効果を計ってきました。そこからは村やキャンプの女性たちが、知識を持って自信をつけたことがよく分かりました。

子どもとの関係がはっきり改

善したという人。夫との関係も改善したという声もありました。楽しくてストレスが減ったという人。また、幼稚園の先生たちも自信をつけていて、幼稚園の経営者に教材をもっと買って欲しいと言えるようになったりしています。他のお母さんたちと話が出来るようになった、友達が出来たという声もありました。自分の子どもは幼稚園を卒園するけれど、幼稚園でのボランティアを続けたいという人も出てきました。家族関係の改善、ストレスの軽減、また村などでのネットワークの形成が比較的進んだのではないかと思います。

3年目からは「よそ者」に警戒心の強い難民キャンプの中でも活動できるようになりました。幼稚園も5か所から7か所に増やし、先生たちのワークショップも、参加者をジェニン市に集めて実施することで、先生同士のつながりが強化されました。

担当のサナも非常に成長しました。自身が母親になったことも大きいのですが、最初のうちは閉鎖的な村や非協力的な幼稚

園経営者に泣かされていたのが、最後の方では自信に満ちて堂々とした態度をとれるようになりました。

街での活動から村に定期的に入ってサービスを提供することで、街と村の格差を少しは縮めることになりました。郡全体に精神科医が一人しかいなくて、忙しすぎて薬を出すだけというジェニン郡ですから、この事業は、心理的にも社会的にも母親と子ども、家族を支援することが出来たし、女性たちの能力を高め、コミュニティの強化につながったと考えています。

現在は

2007年秋からはラマツラ郡に移って、11の村、13の幼稚園で活動をしています。村の中で心理サポートに関わる人材を養成することを目標に、幼稚園の先生への研修と、協力者役としてお母さんたちの研修を実施。2008年1月からは外務省のNGO連携無償資金の協力も得て、ジェニンでの成果を発展させた活動へと広がっています。



お母さんたち

は増えています。もちろん、占領によって移動の自由さえなく、たとえ直接的な攻撃を受けなくてもテレビをつけたら流血状況ばかり。失業や経済的な問題も重くのしかかっています、社会の閉塞感は強く、

大人たちのストレスは日本とは比較になりません。こういうなかで、村の女性たちは外に出歩くこともできないわけで、ストレスの発散をする場もありません。

子どもの教育のことで幼稚園に行くという、立派な口実もあり、同じような子どもを抱えたお母さんたちどうしが仲良くなれて、悩み事をお互いに口にできる場にもなり、新しい知識も増えて、このワークショップはお母さんたちに大変好評でした。聞いた範囲では、全員すごく喜んでいました。最終回になると必ず「また来年もやってほしい」ってみんな言っていました。

パレスチナは、日本と違って育児情報はほとんどありません。一方で、昔ながらの大家族の子育ては減っていて、核家族で子育てが行われていますから、母親たちの育児ストレス